

チェルノブイリ地区の放射性物質からの開放

13. Decorporation of Chernobyl Radionuclides

VB. ネステレシユ、 A.V. ネステレシユ

Institute of Radiation Safety (BELRAD 研究所)

Belarus

要約

他国で健康管理と医療を受けるために、毎年数万人のチェルノブイリの子供達(殆どがベラルーシから)祖国を後にした。歴史的にみても最もひどい大災害の現実をできるだけその被害を少なくするために、多くの国からの医師達は極度に汚染された Chernobyl の地区で無償で働いている。しかし、災害の現実の規模と様態はとてつもなく大きく、チェルノブイリのような大災害に対しては世界中のどの国であっても国では長期的に対処することが不可能である。

ブライベート・フランドや支援団体だけでなく国連と他の国際機関を通しての援助に対しては、被害を被った国々、特にウクライナとベラルーシは感謝の意を表している。チェルノブイリ事故から 22 年後でも、ベラルーシ、ウクライナ両国およびヨーロッパ側ロシアのひどく汚染された地域における年間の個々の線量限度は、まさに局所的に汚染された土地の農産物を避けることができない食生活のために 1mSv/年を越えている。

BELRAD 研究所の 11 年の経験は、子供達のため効果的な被曝予防のためには放射能の基準値を公式な危険限界(例えば 15-20Bq/kg)の 30%に設定することが必要であることを示している。ひどく汚染されたベラルーシの住民の身体中の Cs-137 の全身蓄積を直接測定すると、公式に認められている量より年間では少なく見積っても 3 倍から 8 倍の過量を示している。

実際的には、特にブツバルペク添加食品を摂取することによる治療では Cs-137 の除去効果に効率的に役立っている可能性がある。

1996 年から 2007 年に亘り 160,000 人を超えるベラルーシの子供達に、18 日から 25 日の期間にペクチン添加食品物(1 日に 5g を 2 回投与)を治療目的で服用させた。その結果、ペクチン添加食品による治療毎に、子供達の体内に蓄積された Cs-137 のレベルは平均 30~40%減少した。

放射性物質に汚染された食物の摂取が不可避の状況下にある環境では、個々の人々の放射線防護(放射性物質からの開放)のためには、様々なペクチンペース(りんご、すだり、ぶどう、海草などの使用による)の食品と飲み物を製造し、それらを摂取する

ことが最も放射性物質の効果的な除去方法の1つである。

本文

放射性物質に汚染された状況下にある住民の身体より放射性物質を減少させるには三つの方法が存在する：一つは食べ物に集積された放射性物質量を減少させること、二つ目は人々の身体から放射性物質の除去をさらに効率よくすること、三つ目は人間の免疫力を刺激して更に自然治癒能力を高める方法である。

13.1. 食べ物に集積された放射性物質量の減量について

キノコと野菜などの食物を水に浸す、茹でる、塩漬け、および酢漬けにすることやミルクを処理してバターやチーズを作ることで食物の中の放射性核種の量を数分の一に減らすことが可能である。我々の放射線に対する抵抗力を高めることのできる食品を食べることによって身体の持っている自然治癒能力を刺激することは非常に有効である。このような食品類の中にはフリーラジカルを消去できるビタミンAとC、それに微量ミネラルのI、Cu、Zn、Se、Co等の抗酸化作用物質が含まれている。このような食品は放射線によって生じる過酸化脂質などの組織の酸化を予防してくれる。種々の食品やサプリメントは免疫系を刺激する、例えば小麦、海藻(スピルリナ)、松葉、菌糸体およびその他の植物の芽などである。

放射性核種の排出を促すために次の三つの方法が実行されてきた (Rudnev et al., 1995; Trakhtenberg, 1995; Leggett et al., 2003)。

- ・ 放射性核種の排出を促進するために食べ物の安定的な元素量を増やす。例えばCsの排泄を促すにはK, Rb など; Srの排泄のためにはCa; Puの取り込みを抑えるには三価のFeなどである
- ・ 放射性核種を吸着できる食品類の開発
- ・ 放射性核種を洗い流すことのできる液体で排出増加を計る; 食物繊維の豊富な食品と同様の働きをするように工夫した点滴液、ジュース類や他の液体類などである

放射性汚染からの開放あるいは体内除染とは大便や尿を介して放射性核種の除去を促進するための準備作業でもある。極度の放射性汚染に対する治療のためには特殊な幾つかの効果的な除去の仕方がある(例えばCsの除去にはFe結合物質、またSrのためなどにはアルギネート類や硫酸バリウムなど; Puのためにはイオン交換樹脂などである)。これらの方法は短時間に急激にやってくる放射性汚染などに曝された場合に効果的である。しかし、極度の放射性汚染に曝されたBelarus, Ukraine と, European Russia の地区によっては異なる可能性もある。

Cs-137 の場合には放射能の汚染が小量であっても毎日の被曝を避けることが事実上無理となる。Cs-137 は体内には94%が食べ物からであり、5%が飲み物から、約1%が呼吸による空気から取り込まれる。体内に蓄積される放射性核種は危険性を伴

い、特に子供にとっては危険である。また、Cs-137の高いレベルで汚染されている地域産出の食品類を摂取する人々にとっては危険極まりないことになる。

放射性核種の体内取り込みは放射性に汚染された地域における公衆衛生上まことに基本的な問題ともなっている。そして、全ての可能性を有する放射性核種除去の試みが放射能被曝を軽減するために実施されるべきである。

子供の体内のCs-137の50Bq/kg蓄積が生命に関係する重要臓器に病的変化をもたらすことが明らかとなっている。例えばそれは心血管系、神経系、内分泌系、免疫系などであり、腎臓、肝臓、眼なども同様である (Bandazhevskaya et al., 2004)。

このような障害をもたらす放射能被曝レベルはChernobylで汚染された地域であるBelarus, UkraineとEuropean Russia地区では今尚そのレベルにある。このような地域に住んでいる人々に放射性核種の体内量のレベルの軽減のためにいかなる可能性を有する方法でもなせ必要なのかという理由がここにある。子供達が成人と同じメニューで食事を摂取した時、地域産出の食品類から汚染される放射性核種が成人より5倍以上になる。それは、子供達が低体重であり体内代謝が活発だからに他ならない。田舎に住んでいる子供達は同年代の都会に住む子供達より5倍から6倍の放射性核種に汚染されていることになる。

13.2. ペクチン含有経口摂取食品による放射性核種除去の成績

ペクチンは消化管の中においてCsに化学的に陽イオン結合することが良く知られており、便の排泄量の増加をもたらす。Ukraineの放射線医学センターによる研究と成果 (Porakhnyak-Ganovska, 1998)、また、Belarus 研究所の放射線医学と内分泌学の専門家(Gres et al., 1997)は次のように結論をだしている。即ち、Chernobylで汚染された地域の住民の食物にペクチンを加えた食品を摂取することで体内に蓄積された放射性核種の効果的な排出を促進するという成績を発表している。

1. 1981年に、2年間の臨床試験に基づき、食品添加物について世界保健機構(WHO)と国連とAgriculture 組織(FAO)の合同委員会はペクチンを含む経口摂取食品は毎日経口摂取することにより効果的であり、無害であると宣言した(WHO, 1981年)。
2. UkraineとBelarusにおいて、種々のペクチンを基本にした製品を用いて蓄積した放射性核種の排泄にどのようなように関わるかについて長い間研究している (Gres' 1997; Ostapenko, 2002; Ukrainian Institute, 1997)。Zosterin-Ultraとして知られる水中に生存する植物 (Zosiera) 由来のペクチン含有製品はロシア原子力産業省において使用されている一般予防薬である。この吸収しないペクチンは血液注入用としてゾスチリン注射として用いられ、栄養学的にもまた代謝系にも無害のものである。経口摂取用としての液体 Zosterin-Ultra はウクライナ保健省 (1998)とロシア厚生省 (1999) によって、経口食品と静脈注射用として用いることのできる腸内吸着性および血液吸着性を有する、治療的食品として承認された。
3. 1996年に、BELRAD 研究所は、ペクチン含有食品物(Medetopect, フランス;

Yablopect、ウクライナ)を、Cs-137の排出を早めるためにその治療、腸内吸着療法を開始した。

1999年 BELRAD 研究所は、ヘルメス社(本社：ミュンヘン、ドイツ)と一緒に開発した、Vitapect 粉末として知られているアツアルペクシ添加物を作り上げた。それは BELRAD 研究所によるとペクチン含有量が 18%-20%から構成されていて、ピタミン B1、B2、B6、B12、ピタミン C、ピタミン E、ベータ・カロチン、葉酸から成っている；微量元素としては K、Zn、Fe および Ca を補強し、そして香辛料を加えたものである。2000 年以來よりベラルーシ厚生省により承認されて生産されている。

4. 2001 年 6 月から 7 月に BELRAD 研究所は、「ベラルーシのチェルノブイリの子供」協会(本部：フランス)と共に、シルバースプリングス保養地(Sverlhogorsk 市、ホメリ州)の体内被曝を被った 615 人を対象に、3 週間の期間を定めて非機能の食品摂取群 (Placebo) をコントロールとして Vitapect(1 日に 2 回の 5g 摂取)を服用した群とのダブリング研究を実施した。Vitapect(クリーンな食物とともに)を服用している子供では、Cs-137 レベルは、クリーンな食物のみを服用した群の対照群よりずっと効果的に下降した (Table 13.1 と Figure 13.1)。

Table13.1

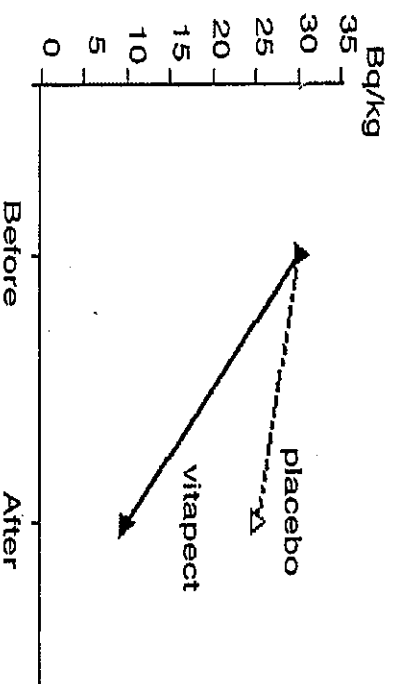
2001 年、Belarus のシルバースプリングス保養地における 21 日(615 人の子供)間の Vitapect 服用後の Cs-137 集積量の減少率 (BELRAD Institute のデータ)

Concentration of Cs-137, Bq/kg			
Group	Before	In 21 days	Decrease, %
Vitapect	30.1 ± 0.7	10.4 ± 1.0	63.6*
Placebo	30.0 ± 0.9	25.8 ± 0.8	13.9

* $p < 0.01$.

Figure 13.1

21 日間の Vitapect 服用(1 日に 2 回の 5g)後の子供の身体中の Cs-137 放射線レベルにおける減少 (Nesterenko 等、2004)



5. Vitapect を服用した別のグループの子供達は、Cs-137 の特徴的活性の相対的縮小率が $32.4 \pm 0.6\%$ であったが、ペクチンなしのコントロールグループの子供達のそれは、 $14.2 \pm 0.5\%$ ($p < 0.001$) であった。ペクチングループの Cs-137 のための平均効果的半減期は 27 日であったがコントロールグループの子供達のそれは 69 日であった。これは Vitapect を服用したグループの子供達における実効半減期の縮小率が 2.4 倍であることを示している。

これらの結果は、クリーンな食品にペクチンを添加した Vitapect 服用が、Cs-137 のレベルを減少させることにおいて、ただ単にクリーンな食品を服用するより Cs-137 の相対的縮小率において 50% 以上高い効率であることを意味している (Nesterenko 等、2004 年)。

6. 7 歳から 17 歳までの 94 人の子供が彼らの初期の Cs-137 汚染レベルに従い全身のカウント(WBC)によって 2 グループに分けられた。16 日間の間、経口で Vitapect(1 日に 2 回の 5g 服用)を与えられたグループの Cs-137 の著しい減少と彼らの心電図の際立った改善率が明らかにされた(EKG; Table 13.2)。

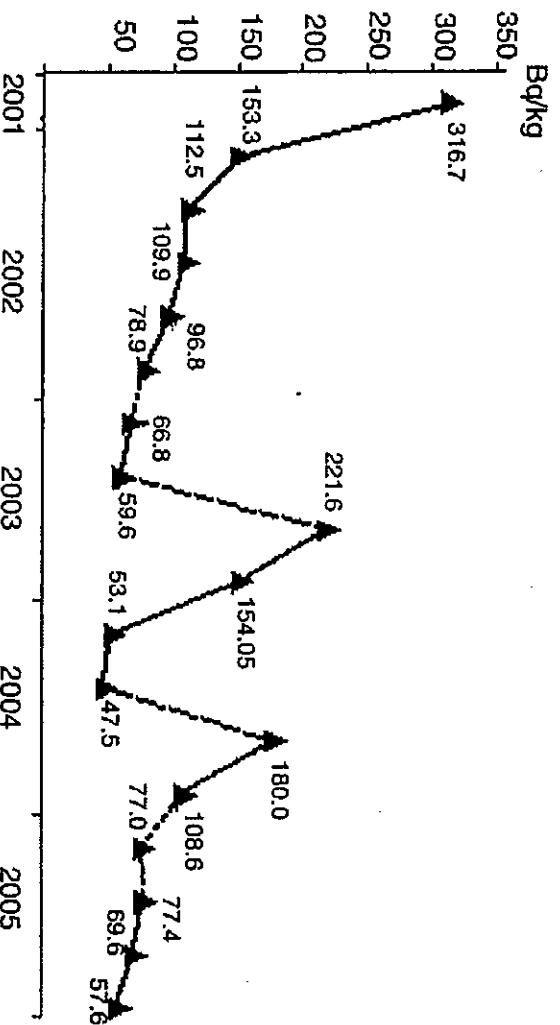
Table 13.2

Cs-137 により汚染された子供達 2 グループにおける Vitapect 服用後の EKG の正常化率の上昇 (Bandazevskaya et al., 2004)

Group	Normal		Normal	
	EKG, %	Bq/kg	EKG, %	Bq/kg
1	72	38 ± 2.4	87	23
2	79	122 ± 18.5	93	88

7. 2001 年から 2003 年、「ベラルーシのチェルノブイリの子供」協会(本部：フランス)、ミッテラン基金(本部：フランス)、チェルノブイリ子供基金(本部：ベルギー)と BELRAD 研究所は Narovlyansky 地区、ホメリ州の 1,400 人の子供達(13 の村を含む 10 の学校)を対象に通年で 5 回以上のサイクルで Vitapect が投与された結果、Vitapect を摂取した子供達は、放射能汚染の程度が年間を通じて 3 分の一から 5 分の一の減少を示した。1 つの村の子供達の結果を Figure 13.2 に示した。

Figure 13.2
 Verbovich 村 (Narovyansky 地区、ホメリ州)の子供達の身体中の Cs-137(Bq/kg)の
 平均放射線量の変化、これらのデータは平均放射線量の変化を示す。点線は Vitapect
 非服用の期間を示す (Nesterenko 等、2004)



8. 経口服用されたベクチンが Cs-137 だけでなく生命維持に必要な微量ミネラル
 元素も吸着除去するので、懸念があったために、特別な研究として 2003 年と
 2004 年に、放射線防護庁 (BFS) のドイツ連邦政府機関のサポートを得たプロジェク
 ト「高い放射能に被曝されたベラルーシの子供」の枠組の中で実行された。このプロ
 クトは 3 ヶ所のベラルーシの保養地(ティンバーランド、シルバースプリングス、およ
 び Belarus 女子療養所)で実行された結果、Vitapect の投与は子供の血中における血
 清 K、Zn、Cu、および Fe のバランス量に対して無害であることが示された
 (Nesterenko 等、2004 年)。

9. ドイツ、フランス、イギリス、およびアイルランドの「チェルノブイリの子供」
 を支援する NGO の依頼により、BELRAD 研究所は、これらの国の健康プログラム
 に参加のための出発の前と再び帰った後の子供達における Cs-137 の線量測定を実施
 した。ただ単にベクチンの含まないクリーンな食物を食べた子供は Cs-137 レベルに
 おいて約 20 から 22%の減少示したが Vitapect を 25 日から 35 日間に服用した治療
 コースの子供達はより Cs-137 の大幅な減少率を示した (Table 13.3 と 13.4)。

Table 13.3

2004年のフランスにおける30日間の Vitapect 服用による46人の子供の放射線量の減少(BELRAD 研究所データ)

	Concentration, Bq/kg		Decrease, %
	Before	After	
Vitapect	39.0 ± 4.4	24.6 ± 3.4	37*
Placebo	29.6 ± 2.7	24.6 ± 2.1	17

* $p < 0.05$.

Table 13.4

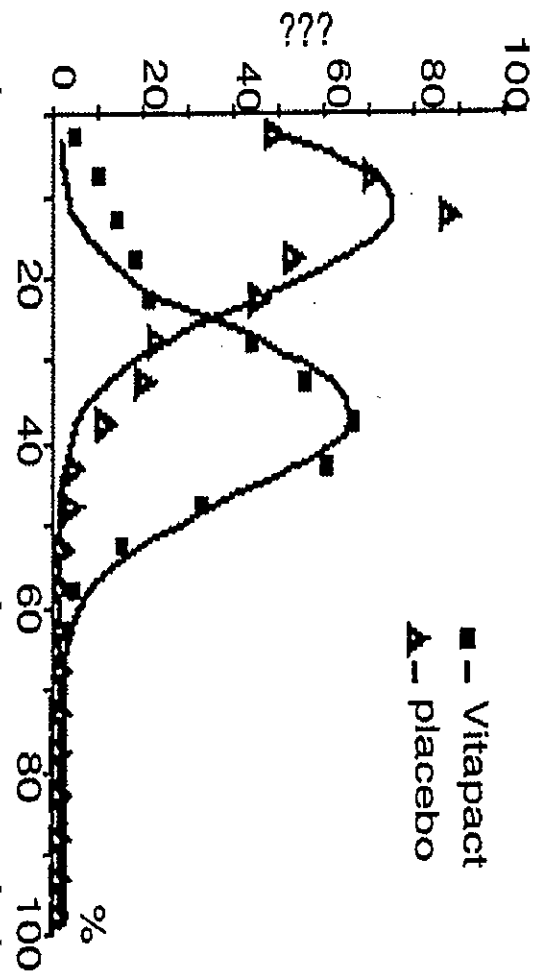
Belarus の子供達に対する Vitapect 投与の前後における各施設間の放射線量の減少率結果(BELRAD 研究所データ)

Concentration, Bq/kg	Decreasing, %		Group data
	Before	After	
30.0 ± 1.5	19.2 ± 1.4*	36	Germany, $n = 43$; Jul. 7 to Aug. 29, 2007
42.1 ± 5.1	19.6 ± 2.5*	53	Spain, $n = 30$; Jul. 2 to Aug. 30, 2007
26.4 ± 1.5	13.2 ± 0.8*	50	Canada, $n = 22$; Jun. 26 to Aug. 22, 2007
23.4 ± 2.0	11.8 ± 0.7*	49	Canada, $n = 15$; Jun. 24 to Aug. 22, 2007

* $p < 0.01$.

10. 1つの実験における放射線量の縮小の頻度分布を Figure 13.3 において示した。Vitapect 服用グループの子供の放射線活性の相対減少率は単純平均 32.4%であり、中央値はそれぞれ 33.6%であった。一方、Vitapect を含まないウーリーな食物を摂取したグループのそれはただ単に単純平均 14.2%、中央値は 13.1%であった。このことは Vitapect 服用グループの効果半減期が 27 日であることと Vitapect を含まないウーリーな食物を摂取したコントロールグループのそれが 69 日であることと相関している。

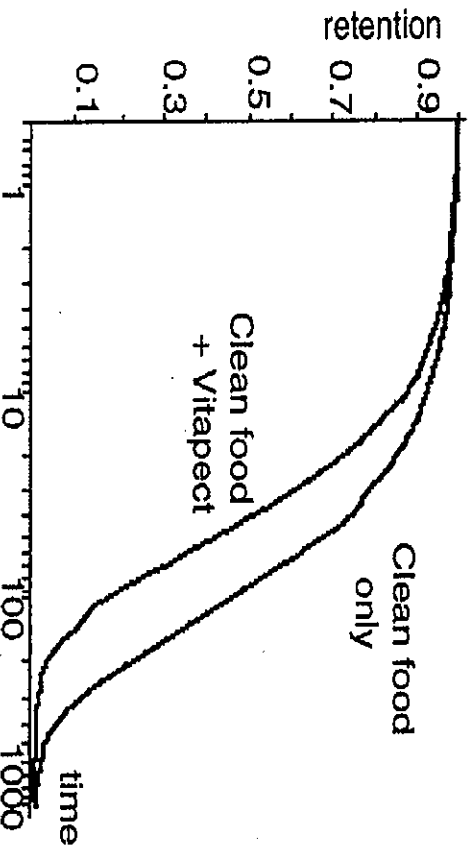
Figure 13.3
Belarus の子供達に対して Vitapect 投与を行った時の Cs-137 身体放射線量の相対的な縮小状態 (Hill 等、2007)



11. 2つの計算された全身残留関数を Figure 13.4(成人用)において示した。最初の曲線は、汚染された食物を $t=0$ からクリーンな食物に取り替える効果を表していて、2番目は、 $t=0$ からクリーンな食物と Vitapect とを同時に摂取した場合のケースである。観察された平均の実効半減期が 69 日から 27 日になるためその縮小率は 2.5 倍の減少になる。

Figure 13.4

Leggett 等による成人の理論的な残留関数(2003 年)、.上部の曲線はクリーンな食物の効果を示し、Vitapect を服用した場合には下ののように吸着による放射性物質の減少の効果がある (Hill 等、2007)



12. 1996年から2007年に、160,000人を超えるBelarusの子供達は18日から25日間の治療コースとして経口的にVitapect(1日に2回の5g)を服用することにした。その結果はそれぞれの治療コースの後でCs-137放射能レベルは平均30%から40%の減少を示した。長期の経験に基づいて、BELRAD研究所は、放射性の汚染された領域に住むすべての子供達が従来の配給食糧とともに経口的なペクチン添加された食品を毎年4回のコースで治療を受けるように勧めている。

過去11年間のBELRAD研究所の活動からみて、327,000人を超える子供達の体内に含まれているCs-137のレベルをコントロールすることで放射能恐怖のアラームを惹起することなく、被曝予防についての知識の普及と個人的な責任のもとに各人の健康についての優れた留意感覚をもたらしたといつてよい。

13.3 放射線直接測定に基づく被曝予防の新しい原則

過去11年間のBELRAD研究所の経験から放射能に汚染された被災地における効果的な被曝予防は、子供にとつては公的に認められている危険被曝線量の30% (i.e. 15~20 Bq/kg) になったら治療介入しなくてはならない

1. Belarusの極度に汚染された地区で個人々に集積されているCs-137の全身放射線量の直接測定は、10サンプリルのミルクと10個のジャガイモに集積しているCs-137の量に基づいて公的に決められた線量であり、過小評価されているために年間の人への被曝線量はそれの約3倍から8倍になる可能性があり、効果的な被曝予防からみて当てにならないことを示している。
2. 真に汚染された人々の放射被曝線量は全身を直接測定する方法で得られたCs-137被曝線量のデータに基づくべきであることは明らかである。それはまた体内に集積された放射線量を示すものである。このことはChernobylの事故によって影響を受けるBelarusの各地区からの地区特産のサンプリルを通じて行われるべきである。
3. 医学的評価を含めて体内に集積されたCs-137線量の全身測定を用いることによつてのみ原因との相関関係が明らかとなり、体内の病的状態の悪化と人々における体内放射性核種の集積状態が共に明らかになるはずである。この時期においても、Chernobylの汚染地区としてのBelarus, UkraineとEuropean Russiaからのみ得られるデータであることを認識すべきである。ここに掲げた資料は被曝予防の計画的推進に誠に大事なものであり、人々を治療し、Belarus地区の最小の被曝の人々をも救うべく意識を持つことのコミュニティを世界的に広めることを説得すべきである。その結果、Chernobylの大災害の次元が理解可能となるう。

13.4 Chernobylの子供達のための国際的な援助が特に効果的であるう分野は世界中でChernobylで起きたような炉心溶融(マルチタウン)に帰する大災害を

長期的に対処できる国はほとんどないといつてよい。特に被害の大きかった Ukraine や Belarus などの国々は国際連合や国際的組織からの援助、民間の基金や支援団体からの援助に対して謝意を表明している。

年間を通じて Chernobyl の子供達が 10 万人規模で健康を回復すべく他国で治療を受けている。多くの国の医師達が被曝汚染された Chernobyl、この歴史上かつてないほどの大災害の被災地においてその影響を最小限にとどめるべく無料奉仕で働いている。

Chernobyl 事故の影響は規模において極めて大きく、また種類も多岐にわたるため、こうした支援の効果をより大きくするためにはどうすべきか常に問われている。

食品材料のモニタールのため長期にわたる経験、また被曝地区に住む住民の身体に蓄積された体内放射性核種のレベルなどそれを基礎資料として、国際的にも国内的にも効果的なプログラムを邁進すべく以下のような提案をさせていただきたい。

- ・ 体内に集積した放射性核種レベルと関連して、特に子供達にどのような病気があり、その頻度を検討する研究組織
- ・ 全ての被曝地区に、特に子供達であるが正常な個々の放射線量の分析と計算、これを遂行するために Belarus は移動検査室を置くことで現在の 8 台、あるいは 12 台、15 台まで増やす必要がある。Belarus と同じく実際に科学的な臨床センサーなどを立ち上げ、高放射能集積の集団を個々に定期的に放射線量の分析を行う施設を Ukraine と European Russia にも設立すべきである。
- ・ 特に被曝された地区において避けることのできない食品を摂取せざるを得ない時には個々人の被曝予防の最も効果的方法として放射性物質の除去に役立つものを開発する。種々のペクチンを基本とした食品と飲用物を、特にりんご、すべり、ぶどう、海藻を中心に製造し投与する。
- ・ BELRAD Institute の経験を活かして、独立した放射線の監視と地域の食品群の放射能の管理をすること。これらまでの施設を取り替えることなく、既存の公的なシステムに追加する。
- ・ 予防的監視のために経口摂取用のペクチン含有食品の定期的治療コースの実施などである。

Chernobyl の極度の放射能汚染地区においてこの大被害の実情の 22 年後が示したものは国際的にも認められる個々人に対する放射線量の限界は 1 mSv/年を越してしまうのが実情である。その原因は地域で汚染された生産物をどうしても摂取消費せざるを得ないからである。このように、体内に集積する放射性核種のレベルをできるだけ少なくするための最終的忠告としては汚染されていない食品を摂取することである。しかし、汚染されていない食品が入手できない地域の人々には吸着性に優れた放射性核種の除去のできる可能性のある食品を提供するべきである。

放射性核種の吸着性に優れた、あるいは少々劣るが効果的な食品は存在する：例え

ばアルギン酸に富む海藻類を用いた食品類はSrを減少させ、鉄とシアン化銅(例えば、フェロシアニド青)はCsの減少に役立つ。活性炭やセルロース、種々のペクチン類は体内に蓄積された放射性核種の吸着排泄に効果的である。特にアルブミンを含む食品は、治療的意味合いもあってCs-137の放射性核種の除染に効果的である。では我々は何をなすべきか：

- ・ 十分に有効な成分量を含んだ農産物を用いて牛乳のCs-137の集積量を減らしなさい--吸着剤の混じった飼料を雌牛に供給して、得られたミルクからクリームとバターを生産するように、またミルクを分離しておくようにする。
- ・ 子供と妊娠した女性の身体から放射性核種の除去と重金属を増大させないためにクリーンな食料品、特に除去機能を持った食品類を提供して護りなさい。
- ・ 地方の食料品と生活様式を考慮して既存の入手可能な食品の放射性核種汚染と、住民(特に子供)の身体の中の放射性核種濃度の測定レベルを住民に知らせるべきである。
- ・ Chernobylで汚染された地域の人々のため、被曝予防の効果的な手段として、ライフスタイルの中に規則的な放射性核種除去方法の実行の仕方を指導するべきである。

栄養補助食品や、種々のビタミンを含むペクチン製剤や微量元素を摂取することが体内蓄積した放射性核種の除染方法に極めて有効であることが明らかになった。

和訳責任者 田澤賢次

富山医科薬科大学 名誉教授

(住所 富山県射水市南太閤山7-18)

電話：0766-56-5631 携帯：09093939649

メールアドレス：tzwa@vanilla.ocn.ne.jp

注：使用されている原子記号の金属名

Cu：銅

Cr：クローム

Cs：セシウム

I：ヨウ素

Rb：ルビジウム

Pu：プルトニウム

Zn：亜鉛

Ce：セレン (セリウム)

Co：コバルト

K：カリウム

Sr：ストロンチウム

Ca：カルシウム

Fe：鉄